管の障害に起因する皮質骨の低栄養，低酸素により惹起される骨変化であると推測された．この所見の放射線障害の predictor としての意義について考察する．

6 脊髄ヘルニアの一例

佐藤 晶・渡辺 雅人
野崎 洋明・河内 泉（新潟大学 神経内科）
辻 省次

緩徐進行性の不全型 Brown－Sequard 症候群を呈し MRI が診断に有用であった特発性脊髄ヘルニアの症例を経験したので提示する．

症例は奇形・外傷歴のない53歳男性．10年間の緩徐進行性の経過で右下肢の感覚異常と左下肢筋力低下を呈し神経内科を受診した．神経学的には左下肢の MMT 4 レベルの筋力低下と左優位の両下肢深部腱反射亢進と病的反射を認め，感覚系では右 Th10以下に温痛覚の低下を認めた．後索症状は認めなかった．脊髄 MRI では Th 4－5 レベルで脊髄が前方に屈曲・変位し硬膜前方に突出しており，硬膜内の脊髄は萎縮性に認められた．脊髄ヘルニアの診断で当院整形外科において Th 3－6 椎弓切除術，脊髄還納・硬膜修復術を施行したところ症状・神経徴候の軽減を認めた．

従来，特発性脊髄ヘルニアは極めて稀な疾患とされていたが，1990 年以降 MRI の普及に伴い症例報告が増加し，これまでに34例が報告されている．本例においても脊髄 MRI の特徴的な所見により診断に到ることができた．従来の報告例の約80％が手術により症状の軽減を示しており，本例でも術後症状の改善を認めたことから，診断の意義は大きいと考えられる．

Ⅱ．特 別 講 演

「新御三家時代の MRI」

新潟大学放射線科
岡 本 浩一郎

第44回新潟画像医学研究会

日 時 平成12年11月18日（土）
午後 2 時～ 5 時30分

会 場 ホテルディアモント新潟
B 1 F

Ⅰ．一 般 演 題

1 経静脈超音波造影剤による心筋コントラストエコー像と心筋シンチグラフィーとの比較の試み

榛沢 和彦・北村 昌也（新潟大学 第二外科）
諸 久永・林 純一
中島 孝・福原 信義（国立療養所犀潟病院 神経内科）

わが国でも超音波造影剤（レボビスト）の使用が認められ，様々な領域の超音波検査に応用が始まっている．特に造影剤を用いた各種臓器の perfusion imaging が注目されており，心エコーにおいては心筋コントラストエコー法と呼ばれている．心筋コントラストエコーはこれまで冠動脈に直接気泡等を注入して行っていたが，超音波造影剤の登場で経静脈投与で行える極めて低侵襲な検査となった．またこれが行えるようになった背景にはエコー機器の発達に拠るところも大きく，特に壊れやすい気泡を主体とするレボビストの使用では間欠送信によるフラッシュエコー法が不可欠である．今回我々はレボビストを用いた心筋コントラストエコーを精神，神経疾患患者で虚血性心疾患が疑われる患者に行い心筋シンチグラフィーとの比較を行った．その結果，パワードップラーを用いたフラッシュエコー法では心室瘤を伴うような明らかな虚血部位でよく一致したが，軽度の虚血部位では一致しなかった．この原因としては心筋シンチでは細胞レベルの代謝を反映するのに対して心筋コントラストでは微小循環を反映していること，パワードップラーでは blooming を起こし易いことから軽度の病変が分からないことなどが考えられた．そこで現在はパワードップラーを用